

ったと見られた。

1984年(昭和59年)、丸稚ネットとビームトロール網により、稚仔魚の採集を試みたとき、6月16日の調査で、全長4.1mm~19.1mmにおよぶ、さまざまな大きさの稚仔魚を採捕出来たが<sup>8)</sup>、このことも、産卵期が長いことを裏付けていよう。

ここで、産卵から孵化までの時間はどのくらいかを考えてみると、まず、胚体が形成されるのに4~5日(水温14~15℃)がかかっている(人工授精の試みから)。また、胚体が2周している眼の黒い発眼卵は、数日(2~3日)で孵化した。胚体が形成されてから、発眼卵になるまでに要した日数は、分からないが、これを1週間程度と仮定(追跡調査から観て推定)すると、孵化までは、約2週間程度となる。

これらのことより、イシカワシラウオには、成長段階の異なるいくつかの産卵群があること、そしてこれらの群が、時期を変えて次々に産卵場を訪れ、この産卵場を利用しているものと考えられた。

## おわりに

1988年(昭和63年)4月、春の日本水産学会で、ここにまとめたものの一部を、口頭発表(4月2日・第VII会場;プログラムNo. 732と、No. 733)してから、12年余が経過している。

今、何故ここに?。そんな疑問をアタマの片隅に、消え失せそうな記憶をたどりながら、当時の資料を引っぱり出して、出来る限り正確に、たどった道を記した。

この調査は、福島県温排水調査管理委員会が、毎年実施している温排水調査<sup>5~8)</sup>の一環として実施したものであり、詳細のデータetc. については、各年度の報告書に記載してある。その1987年と1986年のデータをもとに、この海域の産卵期のイシカワシラウオに関して、研究的な観点からとりまとめた。

福島県沿岸海域で漁獲されるシラウオに関しては、竹内の精力的な研究がある。本県の沿岸に出現するシラウオには、2種類あることについては知られていたが、竹内は、沿岸域で漁獲されるものの殆どを占めるものが、イシカワシラウオ、*Salangichthys ishikawae* WAKIYA et TAKAHASI であることを種の査定により明らかにしている<sup>9)</sup>。(もう1種類は、シラウオ、*Salangichthys microdon* BLEEKER であり、本県唯一の内湾である松川浦で採捕されたものについて、平川<sup>10)</sup>の報告がある。)

竹内はまた、請戸地先付近において船曳網で漁獲された、イシカワシラウオ成魚の熟度を検討して、産卵期を推定している<sup>3)</sup>。更に、1982年と1983年の2ヶ年にわたり産卵場調査を実施して、1982年3月5日には熊川前水深10m地点で40粒(すべて発眼卵)、1983年3月8日には小良ヶ浜前水深5m地点で572粒のイシカワシラウオ天然卵の採集を報告している<sup>11, 12)</sup>。

イシカワシラウオは、沿岸海域を生活領域としており、寿命も1年と短いため、沿岸域の漁場環境が悪化した場合、最も影響を受けるだろうと予想される。

私達は、1984年から1987年の4年間にわたり、成長段階別生態を明らかにしようとして、時期を変え、採捕の場所を変え、そして漁法を変えながら、様々な成長段階別にあると思われた、イシカワシラウオを追いかけた。採集に用いたのは、丸稚ネット、ビームトロール網、船曳網、刺し網などであったが、調査海域が岩礁地帯が多かったため、採集器具に様々な工夫をこらした。

また、この調査と平行して(同時に、同じ場所で)、その生息環境を明らかにしようとの目的で、水質、底質などの環境調査が、東京電力(株)により行われている。解析してみたい多くのデータが眠っている。

末尾に、調査海域の岩礁分布図を示したが、小良ヶ浜の産卵場は、殆どが陰しい岩盤に覆われていて、水深4~5mの碎波帯の中の厳しい自然条件下にあった。はっきり言って、この調査は困難だった。たくさんの人にお世話になった。